

百合香が、会社の同僚の祐也と付き合うようになって、もう半年ほどが過ぎた。

最初にアプローチしてきたのは祐也の方で、会社帰りに食事に行ったり、休日に遊園地などに出かけたり、順調な交際を重ね、何度目かのデートで、体も重なる関係になった。

年齢は、祐也の方が一つ年上で、並んで歩いても、身長のつり合いも取れた美男美女の組み合わせで、申し分のない二人だ。

社内でも、特に交際をアピールするわけでもないけど、極秘というわけでもなく、周囲から暖かく見守られていた。

どちらも、一人暮らしだったから、お互いの部屋を行き来するようにもなった。

このまま、数年付き合つて、結婚までしちゃうのかな、などと、なんとなくではあるが、百合香はそう考えていた。

一人暮らしとは言つても、百合香の場合は、大学進学で地方の実家から出て、一人暮らしを始め、そのまま就職して現在に至っているが、祐也は、母子家庭での実家暮らしだったのが、母親が数年前に再婚して、家を出たので、そのまま一人で実家に住んでいるのだった。

祐也の母は、二十歳頃に祐也を産んですぐ離婚し、それから女手一つで祐也を育ててきたが、祐也が二十歳を過ぎて、もう親の役目も果たしたと安心したのだろう。

その後、良い相手を見つけ、再婚したのだそう。

今でも時折、家に帰ってきたり、電話で話をしているというから、親子関係が悪いわけでもないのだろう。

百合香も、祐也の家に行った時に、何度か顔を会わせているが、「祐也をよろしくお願いしますね。」などと言ってくれる、優しそうな母親だった。

今週末も、特に予定は無いので、二人は祐也の部屋で、のんびりと過ごすつもりだった。

外食も面倒なので、食べ物やビール、ワインなどを買って、二人でテレビでも眺めながら一緒にご飯を食べて、その後は、一緒に布団で朝まで、というのが、普段通りの、週末の過ごし方だった。

二人で並んで飲みながら、テレビのバラエティー番組などを観ても、内容など頭に入らず、お互いの腕と腕を絡ませたりして、仲良しの雰囲気が充満していた。

そして、いつものように、祐也は百合香を抱きしめ、そのままソファに横たわらせた。

「もう、お片付けもしてないし、お風呂にも入ってないんだから。」

「そんなの、後回しでも良いだろう。」

などと言いながらキスを交わす。

百合香も、口では駄目と言いながらも、すっかりその気になってしまふ。

祐也の手が、スカートの中に伸びる。

「本当にエッチなんだから。」

「だって、百合香が魅力的だから。」

「そんなに慌ててしなくても、朝まで一緒に居るんだからね。」

そんな事を言いながらも、百合香も、まんざらではない様子だ。

祐也も20歳代半ば、したい盛りだろう。一緒に居れば毎晩でも求められそうだ。

「ねえ、普段の日にも、したくなってるんじゃないの。」

「まあね。」

「そんな時はどうしてるの。エッチなDVDとか観ながら、寂しさを我慢してるの。自分一人で満足してるのかな。」

「それは…。」

「私と一緒に居ると、一晩に何度もするんだから、一緒に居ないウィークデイだって、ずっと禁欲してるんじゃないんでしょう。」

「まあ、それはそうだけど…。」

百合香にしてみれば、たわいないやりとりだったけど、祐也は痛いところを付かれたのだろう。ちょっと口ごもってしまう。

百合香は、ちよつと意地悪な気分になって、さらに追求する。

「エッチな本を見てるのかな。それともDVDとかネットの動画とかで愉しんでるのかな。ねえ、どんなのを観てるの。私も観たいな。」

「それはダメだよ。」

「どうして。女だってそういうのを観たい気分になる時だってあるわよ。」

「いや、でも…」

祐也はかたくなに拒否している。

当然の事だろうけれど自分の自慰ネタのDVDなどを、恋人と一緒に観るのは恥ずかしいだろう。

百合香はさらに追い打ちをかけるように挑発する。

「ねえ、一緒にお気に入りのエッチなDVDを観ようよ。祐也がどんなタイプが好きで、どんなことをしたいのか、私だって興味あるわ。これからもずっと一緒に居るつもりなんだからね。」

「それは嬉しいけど、だからって一緒に観なくたって良いだろう。」

「ねえ、どんなことやってるのが好みなのよ。なんなら私が同じようにやってあげるわよ。好みの女優さんと同じには成れないけど、同じ事するくらいは出来ると思うよ。」

「ダメだよ、そんな事。」

「大丈夫よ。正常位が好きとかバックが好きとか、好みは色々でしょう。私を縛ってみたいとか、ハイヒールで踏まれたいとか、私の顔に精液をかけてみたいとか。まさか、男同士の絡みが好きなんて話じゃないでしょう。それは無理だからね。」

「そんなのじゃないけど、百合香に見せるのはちよつと。」

「隠されると、ますます知りたくなるわ。ねえ、お願い。」

そこまで言われて、祐也も気持ちが悪くなったようだ。

「ホントにDVDみたいな事をやらせてくれるの。」

「ええ、よっぽど無理な事じゃなければね。」

「普通のセックスとはちよつと違うことだよ。そんな変態行為はイヤ。もう別れる。なんて言わな
いかな。」

「大丈夫よ、ちよつとくらいアブノーマルだつて。その方が刺激のかもしれないしね。」

「じゃあ、ちよつとだけ観せてあげる。」

そう言つて、祐也は隣の寢室に行き、どこかに隠してあつたDVDを一枚持つてきた。

プレーヤーにセットして再生スイッチを押すと、タイトルが流れ始める。

「凌辱病棟」

それは、病院で医師が女性患者を診察し、胸に聴診器を当てたり、婦人科の診察台に乗せ、女性の
秘部を診察したりする内容だつた。クライマックスでは、美人の看護婦が婦人科診察台に乗らさ
れ、浣腸され、そのままの体勢で排泄を強いられ、恥じらいながら、ウンチとおしっこを出してし
まうシーンで終わった。

1時間弱のDVDを全て観終わると、百合香が改めて祐也に問いかける。

「こういうのが好きなのね。お医者さんごっこがしたいの。看護婦さんが好きなの。」

「実はね、僕は浣腸するシーンが一番好きなんだ。」

浣腸という単語を耳にして、百合香の心は乱れた。

一年ちよつと前、まだ祐也と付き合い始める前に、成り行きでAVに出演し、浣腸され排泄シーンを撮られたことがあつたのだ。

「浣腸ねえ。私にも浣腸したいつてこと。」

平静を装つて、さりげなく訊いてみる。

「まあ、させてあげても良いけどね。」

祐也の眼が輝く。

「じゃあ、今からすぐにしても良い。」

「ええつ、今からするの。」

「うん。百合香がそう言ってくれるんだから、すぐにでもしたいんだ。」

「だって、浣腸なんて、今ここに無いでしょう。これから買いに行くの。」

「いや、我が家では浣腸は常備薬で、いつでも薬箱にはいつてるんだ。」

「常備薬なんだ。」

百合香は呆れたようにつぶやく。

「僕も母も、便秘になることが多かったからね。」

「お母さんも、なの。」

「そっだよ。親子だから体質も似るんだろう。」

「そうじゃなくて、母親が便秘になったことを息子が知ってるの。」

「我が家はそうだったんだ。」

百合香は、ふと頭に浮かんだ事を、そのまま口にしてしまう。

「もしかして、便秘になった時にはお母さんに浣腸してもらってたの。」

祐也は、口ごもりながらも答える。

「うん、そうけど…」

「それで浣腸が好きになったのね。でも、それなら浣腸する方よりも、される方が好きなんじゃないの。」

「うん。実はするのもされるのも好きなんだ。」

「するのも好きって… まさか、あなたがお母さんに浣腸してあげてたの。」

祐也は、恥ずかしそうに頷く。

「僕は、それこそ赤ちゃんの頃から、母から浣腸されてたけど、大きくなってからは、僕が便秘になった時は母から浣腸されて、母が便秘の時には、僕がしてあげてたんだ。」

百合香は、その情景を想像して絶句した。

あの美人で優しそうなお母さんが、祐也にお尻を見せて浣腸を受けていたなんて。

そして、また一つの疑惑が浮かんだ。

祐也は、百合香との初めてのセックスまでは、童貞だったと言ったが、それにしても、最初から女性の扱いが上手だった。

指先での前戯だけで、百合香は絶頂に達しそうなくらいだった。本当に童貞だったのなら、そのテクニックはどうやって身に付けたのだろう。

今までは、過去の恋愛経験をごまかす為の嘘だと思つて、深くは追及しなかったのだが、もしかして本当は母親と性的な関係が有つたのでは、と、そんな想像までしてしまう。

「それで、お母さんには浣腸してあげただけなの。」

祐也は言いにくそうに、ロゴもりながらも打ち明ける。

「実は、母から性教育のレクチャーもされたんだ。」

「性教育つて。」

「僕のペニスを弄つて、射精の気持ち良さを教えてくれたのも、女性のあそこをどうやって刺激すれば、良い気持ちになるのかを教えてくれたのも、実は母なんだ。」

「だって、実の母子でしょう。」

「セックスはしなかったんだよ。近親相姦は絶対にダメつて。」

「そんなの当たり前じゃない。」

百合香は、ちよつと怒つたような口調になる。

「でも、もう大人になつてからは、そんなことはしてないよ。」

「浣腸も、性教育も。」

「お母さんは再婚しちやつたしね。」

「そう。だから今は浣腸する相手も、してくれる相手も無くて、淋しくDVDを観てるくらいなんだ。」

お母さんとの事はショックだけど、過去の話だ。

私だって大学時代には彼氏も居たし、祐也と初めての時には処女じゃなかったし、秘密だけどAVに出たこともあるんだから、お互い様かもしれない。

これから、祐也と一緒に生きて行くつてことは、そういう事も抱えた上で、一緒に居るといふこと

なんだろう。

「じゃあ、これから浣腸しようか。」

浣腸なんて恥ずかしいけど、祐也との関係を大切にしたい、望みは叶えさせてあげたい。

百合香はわざと明るく、そう切り出す。

「させてくれるの。」

「うん、させてあげても良いよ。して欲しいなら、私が祐也に浣腸してあげても良いけどね。」

「じゃあ、イチジク浣腸は一箱に二つ入ってるから、お互いにすることにしない。」

「良いけど。トイレに同時には入れないよ。」

「先攻と後攻で、順番にしよう。」

「そうね。どっちが先攻かな。」

いつもの二人の明るさが戻り、テーブルの上のワインの瓶や皿を片づけ、お風呂も沸かして、朝まで過ごす準備も整えた。

祐也が、薬箱の中からイチジク浣腸の箱を出して来る。二個入りで、まだ未開封の箱だ。

ジャンケンで順番を決めようと言って、ジャンケンをするが、勝った方が先にするのか、される方なのかはつきり決めず、ジャンケンでは百合香が勝った。

「百合香が好きな方を選んで良いよ。」

「じゃあ、されるのはまだちよつと怖いから、先に祐也にしてあげるね。」

百合香がそう言うと、祐也はズボンとパンツを脱ぎ、下半身には何も身に付けてない状態になり、百合香に背を向けて、ソファーに横になる。

「百合香に浣腸してもらえるなんて、嬉しいな。」

してあげるとは言ったものの、百合香は浣腸をした経験はない。

子供の頃数回と、大人になってから一度だけ、された事は有るが誰かにしてあげるなんて初めてだ。手順が判らず戸惑ってしまう。

「どうやれば良いの。」

「まず、そのワセリンを指先に取って、お尻の穴に塗って、その後で、キャップを取って浣腸を挿しこむんだよ。根元まで入ったら、丸い部分を押しつぶして、中のお薬を腸に流し込むんだ。入れ終わったら、お尻から抜いて、お尻の穴をティッシュで押さえなければ完了。簡単だよ。」

百合香はためらいながらも、ワセリンを指に取り、祐也のお尻を押し広げる。董色というのだろうか、肉色の濃くなった部分が目の前に現れる。

そのすぐ前には。毛の生えた柔らかそうな肉の袋が見える。

さらにその前にある肉の棒は、もう膨張して硬くなっている。

董色の肉穴に、指先のワセリンを塗り付けると、ヒクヒクと蠢いて反応を示す。

ああ、浣腸されるのが嬉しくて、お尻の穴も待ち構えているし、おちんちんもあんなに大きくなってるんだ。

そんな事を思うと、なんだか、浣腸してあげるのが嬉しい気分になってくる。

浣腸の先端をお尻の穴に差し込み、根元まで押し込むと、

「じゃあ、お薬を入れるよ。」

と宣言してから、ゆつくりと丸い部分を押しつぶす。

平たくなった球をさらに半分折り、残った液まで流し込むと、使用済みの浣腸を抜き取り、ティッシュを折りたたんでお尻の穴に当てる。

「これで良いかな。」

「うん、百合香に浣腸してもらっていると、とっても素敵な気分だよ。」

「浣腸されて、おちんちんを硬くして、快感に浸ってるのね。変態だわ。」

百合香は冗談のようにそう言っ、笑って見せる。

本当は、百合香の方も初めての経験にドキドキしているのだ。

しかも、してあげるだけじゃなく、この後は百合香が浣腸される方の立場になることが決まってる。

祐也の体の中に浣腸液を流し込みながら、まるで自分自身の中にも液が注入されているような錯覚さえ感じる。

なんだから、こんなに喜んでる祐也の姿が嬉しくて、つい硬くなった肉棒に手を伸ばしてしまう。どうせ、今夜はこれが私の中に入ってきて、私に快感を与えてくれるんだ。

前もってちよつと悪戯しても良いだろう。

祐也は、それを拒むでもなく、うつとりした表情で、百合香にされるがままになっている。

数分が経過し、祐也がモジモジとしはじめる。

「もうウンチしなくなった。トイレに行く。」

「いや、もうちよつと我慢してみる。我慢していつぱい出せば、それだけ気持ち良くなるんだ。」

「お母さんにも、そうやって我慢させられたのね。」

「うん、いつぱい我慢していつぱい出したら、御褒美として、気持ち良いことをしてくれたんだ。」

「気持ち良いこと…」

「うん、手でおちんちんをちよつとね。」

「そんな事を親子でやってたのね。」

そんなやりとりをしてる間にも、祐也の便意は高まってきている。

「もう、無理かな。トイレまで連れて行ってくれるかな。」

「どうすれば良いの。」

「そのまま、ティッシュで押さえて、トイレまで付いてきて欲しいんだ。」

「良いわよ。起き上がれるかな。」

祐也は立ち上がると、百合香にお尻を押さえられたまままでトイレまで行き、便器に座ると同時に、排便を始めた。

ドアを閉める間もなく、百合香は祐也の排泄シーンを見守っていた。

祐也は、恥ずかしそうな嬉しそうな表情で、腸の中のものを出すことに集中し、全てを出してしまおうと、全身に力を込めた。

排泄が一段落して、祐也が自分でお尻を拭きトイレを流した後、二人は手を繋いで居間に戻った。祐也はまだ下半身裸で、おちんちはそそり立ったままだ。

次は百合香が浣腸を受ける番だ。

「さっきの祐也と同じような格好になれば良いの。」

スカートは脱がなくて、ショーツだけ脱いだ方が、エッチっぽいかな。」

「そうだね。最初からお尻を出してるより、スカートを捲って、お尻を出すほうが、エッチな雰囲気が出そうだね。」

祐也もそう言うので、ショーツだけを脱ぎ、ソファアに横になろうとする。

その肩を、祐也が抱きしめて、横になるのを止める。

「百合香にはリクエストがあるんだ。」

「何かな。」

「横になるんじゃないなくて、別のポーズで浣腸させて欲しいんだ。」

とっさに、百合香の頭には、さっき観たDVDのシーンが浮かんだ。

「もしかして、さっきのみたいに、仰向けで大きく脚を開くポーズかな。それはちよつと恥ずかしいな。」

「それも刺激的で良いんだけどね。百合香にして欲しいのは、ソファアに肘を付いて、大きくお尻を上げたポーズなんだ。」

「どうして。そんな格好で良いの。」

祐也はためらいながら口を開く。

「実はAVで大好きな女優さんが居てね。一作しか無いし、それも大勢の中の一人なんだけどね。」
百合香は、どきつとする。

「それは、白岩李枝っていう人なんだ。」

後ろから祐也に抱きしめられたまま、耳元でそう囁かれて、百合香は頭の中が真っ白になってしま

その名前は、百合香がたった一度だけAVに出た時に、とっさに思いつき、使った名前だった。二人共が、凍り付いたように動きを止める。

沈黙の時間が流れる中で、百合香が口を開く。

「いつから、そんなAVが有るのを知ってたの。」

「うん、百合香と付き合い始めて、ちよつとしてからだよ。」

祐也は、百合香が入社してきた時から、気になっていた。

職場であれこれと話をしたり、一緒に仕事をしたりするうちに、その思いはますます高まってきた。

でも、自分の性癖が、世間の女性にはあまり受け入れられるものではないという認識があったので、百合香にアプローチするのはためらっていたのだ。

そして、職場の飲み会をきっかけにして、百合香と付き合い始めてからは、その性癖や過去の母親との出来事は、一生秘密にして、百合香と一緒に居ようと思っていた。

まだ、百合香と体の関係になる前、一緒に食事に行ったり、遊びに行ったりしていた頃に、ふと入ったアダルトショップで、好みの浣腸もののDVDを眺めていた時に、偶然そのパッケージが目に入ったのだ。

10人ほどの女性が浣腸されて排便をするというDVDで、その中の一人が百合香に似ていると思いい、まさか本人とは思わずに、それを購入したのだ。

「帰ってそれを観て驚いたよ。よく似た女性だと思っていたら、どう見ても百合香本人だったんだからね。」

「ごめんなさい。今まで黙っていて。」

「いや、僕だって浣腸趣味を秘密にしてたんだから、お互い様だよ。」

「だって、AVに出ちゃったんだよ。そんな女、嫌いにならないの。」

「うん、ショックだったけど、嫌いにはならなかったんだ。セックスしたわけじゃないし、裸にな

つたわけでもないし、ただ浣腸されてウンチをしただけだからね。」

「でも、DVD買った不特定多数の人に観られちゃうんだよ。」

「それは悔しいけどね。僕も毎日、百合香のお尻を観ながらオナニーしてたんだし、今は画面の中だけじゃなくて、本物のお尻に触ることも出来るんだから、満足もしてるよ。」

「一生、DVDの事も秘密にしておこうと思ってたんだ。その一本だけだよ。その後、いくら探しても、ネットのアダルトサイトで検索しても、白岩李枝の出演したAVは見つからなかったし、動画サイトでもアップされてなかった。だから、何年も経ってしまえば、もう誰も知らない事になつてしまうと思つてたんだ。」

「そうね、あの時に気の迷いとなりゆきで、一本だけ撮られたけど、それ以外にはあんなことしてないわ。もう、自分でも忘れようとしてたし、忘れかけてたの。」

「ごめんね。思い出させちゃつて。でも、百合香がエッチなDVDを観たいなんて言い出すから。」
「良いの。忘れようと思うしようと、実際にあった事だしね。それであなたに嫌われても、仕方ないような事だものね。」

「こんな素敵なる人を、嫌いにはなれないよ。それに、僕の趣味も理解してくれるようで、浣腸の趣味に付き合ってくれるんだもの。」

百合香は、その言葉を聞いて涙ぐんでしまう。一生、祐也についていこうと、改めて心に誓った。

せめてもの償いに、祐也が満足するように、祐也がしたいと言うことは、すべて受け入れよう。

百合香は覚悟を決めた。

「じゃあ、今度は私が浣腸される番ね。どんな格好でも、あなたが好きなポーズになるからね。」

「本当に。さっきのDVDみたいに、内診台みたいなのでも良いの。」

「凄く恥ずかしいけど、それで祐也が喜ぶならね。」

「白岩李枝のDVDみたいに、浣腸の後にウンチが出るところまで見たいって言ったら。」

「それも、凄く恥ずかしいけど、どうしても見たいなら良いわよ。」

「まあ、そこまでしなくても良いよ。あのDVDみたいに、ここでされても、後片付けが大変だろ

うしねえ。」

「そうね、あんなのは無理だよね。」

「じゃあ、さっきの僕みたいに、トイレまで一緒に行つて、出すところを見ている良いかな。」

「それも凄く恥ずかしい。DVDとは違って、匂いもするんだから。でも、あなたが望むなら、何されても良いわ。」

「一度きりで満足しないでしよう。これからも、何度も浣腸したり、されたりするよね。そのたびに、違ったポーズでされても良いわよ。」

「そうだね。次にする時は、内診台のポーズかな。それも、刺激的だよね。」

「とっても恥ずかしいけどね。」

「百合香の恥ずかしがつてる姿が、可愛くて素敵なんだ。」

「じゃあ、さっき言ったように、こちらにお尻を向けて、ソファーに肘をついてくれるかな。」

百合香は言われた通りのポーズを取る。

あのDVDで、浣腸された時と同じポーズだ。

「じゃあ、浣腸するよ。」

そう言うと、祐也は百合香のスカートを捲り上げ、お尻の穴をむき出しにする。

お尻の穴の位置をしっかりと見定めてから、祐也はワセリンを指に取り、百合香のお尻の穴に丹念に塗り込む。

穴の表面だけでなく、中まで侵入するように、指が動く。

「そんなにされたら、浣腸される前にムズムズしてきちゃう。」

「こうして、しっかりとマッサージもしておいてあげるよ。ウンチが出る時に切れたりするといけな
いからね。」

「そんなに奥まで指を入れたら、汚いわよ。」

「汚くなんかないさ。汚いつて言うくらい、ウンチを溜め込んでるのかな。」

「嫌ね、そんな事無いわよ。毎日、お通じはあるのよ。今日の分はただだけどね。」

「じゃあ、一日分は溜まつてるんだね。浣腸して出すには、ちょうど良い量かな。」

そんな事を言つて、祐也はわざと百合香を恥ずかしがらせる。

お尻の穴を弄られながら、百合香は赤面してしまふ。

「じゃあ、これから挿してあげるからね。」

百合香は無言で頷き、イチジク浣腸の先端が、百合香のお尻の穴に侵入を開始する。

祐也は挿入を愉しむように、ゆつくりと押し込んでいる。

ほんの数センチの先端を、セックスの時のように出し入れしながら、百合香のお尻の穴の反応を楽しんでいる。

「お薬を入れるからね。最初からウンチがしたくなるわけじゃないから、効いてくるまで、良い事してあげるね。」

そう言いながらイチジク浣腸の丸い部分をゆつくり押しして、中の液体を百合香の体内に注ぎ込む。

液がゆつくりと体の中に入ってくる。

それは、腸の中でやがて便意の苦痛に変わるもののだが、百合香は、まるで祐也の精を体内に注ぎ込まれるように感じた。

大好きな人が喜ぶなら、羞恥や苦痛さえも、受け入れられるだろう。

祐也との絆が、一段と進化したように思えた。

液を入れ終わると、空の容器を抜き取り、祐也は百合香のお尻の穴に、フツと息を吹きかける。

穴は、自然に反応して、キュツと締る。

「ウンチが我慢できなくなるまで、しつかり締めておくんだよ。」

祐也はそう言うとお尻の穴に顔を近づけ、今、浣腸液を流し込んだばかりの穴にキスをする。

「嫌ッ。そんなことされたら、すぐにでも出ちやいそよよ。」

「まだ、効いては来ないだろう。もうちよつと良い事もしてあげるよ。」

祐也は、お尻の穴のすぐ下の部分に顔を寄せ、おまんこの穴とクリトリスを、舌で刺激する。

「そんなことされたら、気持ち良くなっちゃう。」

「気持ち良くなっても良いんだよ。」

「祐也のおちんちんを挿れてほしくなっちゃうよ。」

「舌じゃなくて、その方が気持ち良いかな。挿れてあげようか。」

「だって、浣腸されてるのに…」

そうやって二人で戯れているうちに、百合香の腸は薬に反応を示し始めた。

「なんだかムズムズして、ウンチしたくなってきたみたい。」

「まだ大丈夫だろう。もうちよつと我慢しようね。」

そう言いながら、祐也は舌でクリトリスを舐めあげながら、お尻の穴の反応を目の前で観察する。

ヒクヒクと蠢いてはいるが、まだ決壊には間がありそうだ。

「ギリギリになったら、お尻の穴に指を突っ込んで、栓をしてあげるよ。」

「やだ、そんなの汚いし、恥ずかしいよ。」

「トイレまで行く途中の廊下でお漏らしするよりは良いだろう。」

「それも、もつと恥ずかしいわね。」

一度、便意の波をやり過ぎし、百合香は大きく息をつく。

どこまで我慢出来るだろう。

祐也は限界まで我慢をさせたいのだろうけれど、一歩間違えれば、本当に廊下でお漏らしっていう事にもなりかねない。

次の波を堪えようとするが、百合香は崩壊の危機を感じた。

「もう無理かもしれない。トイレに行かせて。」

「じゃあ、お尻の穴を押さえて、ついていってあげるよ。」

そう言つて、本当に指をお尻の穴に入れるようにして、百合香を抱き起し、そのままトイレに向かう。

トイレで便座に腰を下ろし、百合香が安心すると、二番目の波も、少し穏やかになった。でも、ここまで来たら、決壊は時間の問題だ。

百合香は、お尻を緩めて、便意の苦痛から解放されようと思うが、祐也の目の前での排泄は、やはり羞恥心が邪魔をしてしまう。

「本当に、目の前でウンチしても良いの。臭いだってするし、音だって凄いやと思うんだけど。」

「大丈夫だよ、そんな事で百合香を嫌いになつたりはしないから。逆に、これからは僕だけにそんな恥ずかしいところまで見せてくれるんだと思うと、もつと百合香の事が、好きになりそうだよ。」

そう言われて、百合香は思わず、目の前にそそり立っている祐也のおちんちんに手を伸ばす。

そして、それを引き寄せ、口に含む。

祐也は、百合香の行動に戸惑うが、されるがままにおちんちんの刺激を受け止めている。

「大丈夫なのかい。もうウンチの限界なんじゃないの。」

ちよつと心配そうに、祐也が訊ねる。

「お尻には浣腸。お口には祐也のおちんちん。どつちも素敵よ。」

百合香は、そう言つて微笑む。

「でも、もう出るわ。恥ずかしい姿も、しつかり観ていてね。」

百合香は、祐也の肉棒を握りしめながら、お尻の穴の力を緩めていった。

その後、二人がどんなことをして愉しんだかは、これを読んでくれた人の御想像にお任せしよう。

二人は、世間には言えない秘密の趣味と、秘密の過去を共有し、絆をいつそう強くし、しばらく後に結婚した。

子供にも恵まれ、その生涯を終えるまで、一生寄り添つて、仲の良い夫婦として暮らした。